

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.24)

「去りし者と死者には、友は殆どなし？」

・・・髑髏のオンパレード・・・

10月の下旬から11月の前半にかけて、メキシコ市内では髑髏(ドクロ)というか、骸骨(ガイコツ)が至る所に出現する。ホラー現象や、ボラッチョ・ボニート氏によるホラ?話ではない。



布や石膏などで作られたものもあるが、砂糖、アマラントという穀物やチョコレートなどで作ったもの、また広告などにも主役として登場してくる。それぞれの骸骨の表情をよく見ると、いたずらに怖さを強調したもの時には見かけるが、多くは怖いという雰囲気はなく、逆にユーモラスな感じを受け思わず顔の表情が和らいでくる。

当地の人々にとって、骸骨は私がいなく、死体から来る連想としての敬虔なものという感覚を通り越して、日常的に身近になれ親しんでいるのではないだろうかと感じてしまうほどだ。



これらの骸骨類は、11月2日の「死者の日」といって、亡くなった人々を暖かく迎えてなし、手厚くお送りするという、一連の行事が行なわれる日に飾り立てる、オフレンダと呼ばれる祭壇のための小道具の一つなのである。

祭壇の形は大きさの違いはあるものの、お雛様の段飾りのように階段状のものが多く、その飾り付けの内容は、マリーゴールドのオレンジ色の花、いろいろな形に切り抜かれた薄い紙飾り、いろいろな形をした骸骨のオブジェなど、様々である。



配属先の死者の日の飾り

子供の頃、ナスやキュウリで牛や馬を作って、仏壇に供え先祖の供養をした、日本の「お盆」のような行事を思い起こすが、お盆がどちらかというと、静かに行なわれるのに比べ、こちらの方は少しはお祭り気分が漂っている。

そして「死者のパン」と呼ばれる、砂糖を表面にたっぷりまぶした、たとえば悪いが女性の乳房の形をした、いろいろな大きさの



甘パンも欠かせない。最盛期には、パン売り場の一角が、死者のパン、それだけで占められているくらいだ。

死者の日の行事は地域や個人によって、その催す仕方に濃淡があるようで、テレビを見ていたら、お墓でマリアッチを演奏していたのもあった。

いわば、死者の日の行事はしめっぽいものではなく、戻ってきた死者を迎えて、この世の人もあの世の人もみんなで一緒に楽しみましょうよ、お祭りしましょうよと、陽気で楽しいお祭りとして、死者は日々とうとや特

別な存在ではなく、心の中で生者と共にあるのではなからうか。

このお祭りの起源を遡れば、アステカ時代に存在していた死者の為のお祭りに、スペインに征服されたメキシコがキリスト教に改宗させられたとき、カトリックの祭日とアステカの祭りが融合されて、現在の「死者の日」になったという。

そして、その前夜祭が10月31日のハロウィンで、これは異教徒ケルト人の習慣が元になっているという、三民族の競合ぶりであるが、これらの諸事例を、強者による弱者の文明破壊の悲しい歴史の不誠実とみるか、あるいは文明の見事な融合の例と見るかは、日本と近隣諸国間の歴史観の相違の例と同じように、人それぞれの歴史観に関する考えで異なってくる。

現在では、多分そんな裏事情のことも深く考えることも少なく、単純に、通常11月1日は子供の魂が戻ってきて、2日は大人の魂が戻ってくる日だという人もいた。だから1日には子供の好きそうな、甘いチョコレート・ドリンクやミルク、チョコレートやお菓子を飾り、2日は大人の日なので、チョコレート・ドリンクの代わりにテキーラ等のお酒が並べるといふ。

今回のタイトルは本便りとの関連で、「**A los idos y muertos, pocos amigos**」(ア ロス イドス イ ムエルトス ポコス アミーゴス と発音し、直訳はタイトルから疑問符をとった意味だが、日本の諺に当てはめれば、去るものは日々とうとうとということだろうか。余談だが殆どの語尾に **os** が付いていて、読んでいて響きの良い諺である)から採用した。

11月2日は配属先は休日だったので、ボラッチョ・ボニート氏は、3日の日本の文化の日と、根底に流れる宗教観に基づく当メキシコの文化の相違を考えながら、あわせて、過去にいろいろ関わった方々の思いを馳せながら、今回のタイトルに込められた意味を深く考えつつ、甘パンをテキーラのつまみとして杯を重ね、静かに死者の日を過ごしたのであった。

(2009年11月8日、3日間の泊りがけ出張講義を終わり、ほっとした気分です)



2007年11月に撮影した、レフォルマ通りのガイコツ展示作品の一つ



左側は2対のガイコツに着せた結婚衣装・・・近くの仮装用品販売店の風景